

(4) 施設配置計画

海上地区の施設配置の考え方

A. 市民交流プラザでの活発な交流を促すプログラム

中央に位置する市民交流プラザは、政府施設・愛知県施設への移動が容易な位置にあり、それら施設との活発な交流を促し、会場全体を活発化することに寄与する。また、多様な用途への対応が可能な各機能を持つものとし、自由な市民参加、活動、創造など、市民交流プラザ上においても活発な交流を促す場となる。

B. 恒久的利用を視野に入れた計画

政府施設・愛知県施設は恒久的利用を考慮しつつ計画される。開会時は、市民参加ゾーンと一体感のある施設構成とする。閉会後の双方の姿、相互機能を見据えて全体の計画を行い、閉会后、大規模な改修工事を避けるよう配慮する。

C. 海上の森を体感できる空間の演出

海上地区の南側は、遊歩道や海上の森を遠望する施設で構成し、森に包まれた空間の中で里山の自然を来場者が全身で感じる事ができるゾーンを形成する。

D. 海上の森を後世に伝える施設構成

愛知万博では、活発な市民参加や展示イベントで、広く強く海上の森の存在を発信した後は、政府施設・愛知県施設において、海上地区の人と自然の営みや、日本の豊かな自然の恵みと多様性について、永く伝承していく施設構成とする。

青少年公園地区の施設配置の考え方

青少年公園地区の施設配置にあたっては、「地球大交流」を実現する「グローバル・コモン（公式出展ひろば）」と「グローバル・ループ（水平回廊）」の2つの交流舞台を基本骨格とする。

A. 各国や国際機関の出展施設群と共有広場で構成する「公式出展ひろば」：グローバル・コモン

愛知万博における公式出展施設の配置にあたっては、従来の会場計画のように展示施設が分散配置されるのではなく、各国や国際機関の展示施設群と共有の広場からなる一体的な空間をグローバル・コモンとして位置付け、愛知万博における出展施設配置の基本骨格とする。

グローバル・コモンは6つ設置し、展示施設群、共有の広場や様々なイベント、飲食、物販施設で構成し、参加者同士が国境を越えた交流や、来場者との賑わいに満ちた交流を繰り広げ、多様な文化や価値観が共存する空間とする。

コモン（Common）

もともとは入会地や共有地や公用地を表す言葉。そこから発展して自然と共生する人間の共同体の意味や共同体が共有する集団意識やライフスタイル（コモンセンス）の意味にもなる。また、都市における公共空間の意味としても使われている。

日本では、里山や鎮守の森などの故郷の原風景となる共同地の意味に重なり、また村や郷などの自然と共生してきた共同体の意味にも連なる。

公式出展施設 モジュール形式の出展パビリオン

グローバル・コモンに配置する公式参加の出展施設は、モジュール形式（規格化された単位空間の組み合わせ）で計画する。モジュール建設にあたっては、工場での事前加工等を導入し、工事量の削減、工程の短縮など環境負荷の低減を図るとともにコストダウンを図る。

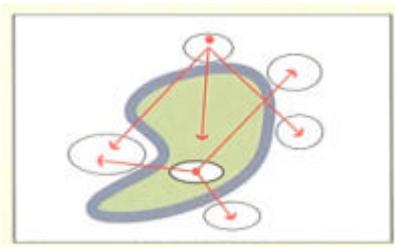
1モジュールは、18m×18m×9m（高さ）とする。

B. 主動線としての「水平回廊」：グローバル・ループ

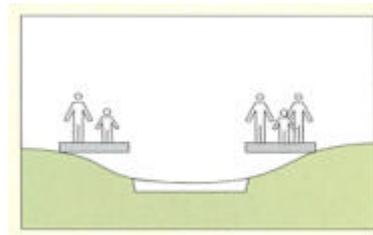
青少年公園地区における観客の主動線は、全長2.5km、標準幅25mで会場をほぼ水平に一周できる空中の回廊であるグローバル・ループとする。グローバル・ループは、6つのグローバル・コモンをつなぐとともに、各ゲート等主要な施設間を結び、「地球大交流」を体験できる空間とする。

C. 立体的な会場構成

グローバル・ループと複層的に地上レベルの回遊動線も設け、自然を体感しながら移動する楽しみを用意する。さらに、青少年公園地区内の南北の移動と、青少年公園地区と海上地区との移動のために空中ゴンドラを敷設し、会場の景観を楽しみながら高速に移動できる動線を確保する。



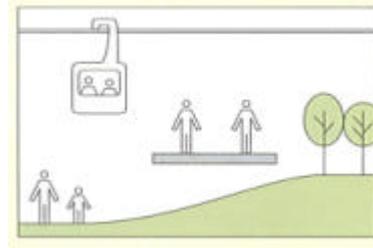
会場全体のわかり易さ
 シンプルなループ構造によって、グローバル・コモンや各施設の位置がわかりやすくなる。



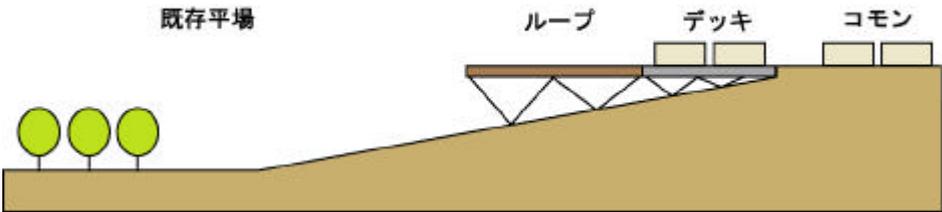
バリアフリー
 起伏のある会場でありながら、フラットな構造なので、快適に巡ることができる。



自然環境への配慮
 土地の改変を少なく抑えられるため、動植物への影響を軽減できる。



立体的会場構成
 空中、ループ、地上の3つのレベルで移動できるため、会場内をよりスムーズに、快適に巡ることができる。



既存平場
ループ
デッキ
コモン

既存平場を積極的に利用し、山側は谷間を使って建物用敷地を確保する。
 土量の移動は、切り盛りでバランスさせる。
 バリアフリー化が比較的容易。
 表動線と裏動線を上下で分離でき、かつ、来場者動線がわかりやすい。

	ループのメリット
主動線の確保	ループによって主動線を確保することにより、大規模な新規造成を避け、環境への負荷を抑制できる。
建築可能面積	地盤面とは異なるレベルに建築用の敷地を新たに作り出すことができるため、新規造成を抑えて、最大限建築面積が確保できる。
観客収容力	観客収容可能面積は「展示施設+ループ+地盤面の通路・広場」の合計であり、大規模な新規造成を行わず、観客収容力を増加できる。
観客動線	主動線がほぼ水平であるため、垂直移動設備に頼ることなくバリアフリーが実現できるとともに、観客の心理的な移動負担を軽減することができる。
管理動線	観客動線と管理動線が上下で分離できるため、フェンス、立体交差など分離のための設備コストが削減できる。 また、動線がわかりやすく、観客の混乱が回避できる。
会場演出	会場が認識しやすく、サイン・誘導にかかるコストが軽減できる。 建物を横、上、下など様々な角度から見るため、変化に富んだ空間演出を行うことができる。

D. ゾーン構成

センターゾーン

グローバル・ループに囲まれた中央部は、既存の温水プール、アイスアリーナをはさんで東に大芝生広場、西にこいの池が存在する。この一帯をセンターゾーンと位置付け、既存施設と2つの空間を有効に活用して、青少年公園地区のテーマ性のあるイベント空間を計画する。

日本ゾーン

西ゲートを入ると、こいの池に面して日本政府館、名古屋市館、かえで池に面して愛知・広域交流館を計画する。この一帯は日本ゾーンとして次代の日本のアイデンティティの再発見・再認識する場となる。

民間出展ゾーン

民間企業等の一般参加による出展施設場所として、青少年公園地区の北端に位置する既設の駐車場や広場を活用して民間出展ゾーンを配置する。民間出展施設は、ゾーン内の敷地に、出展者自らがパビリオンを建設し、運営する方式とする。

ゲートシティ

北及び西ゲートシティは、動線の結節点に様々なサービス機能が複合した動的な構成とし、新しい次元の都市空間に来たことが実感できるよう計画する。

自然と対話する森林体感ゾーン

南東部の森林体感ゾーンは、自然環境への影響を抑えながら自然に関わりあいの深いパビリオンを巡るゾーンとする。

遊びと文化のゾーン

既存施設の「愛知県児童総合センター」や「愛知国際児童記念館」、そしてベビーゴルフ場や子ども達のためのジャブジャブ池を活用して大人や子どもが体験学習できるユニークな「遊びと文化」のゾーン展開を図る。

E. 地盤面レベルの動線

来場者歩行動線

各ゾーン間には地盤面レベルの歩行者道も用意され、グローバル・ループを通らなくても隣接するゾーンを巡ることができる。道沿いには並木、足下には草花が配される。また、透水性舗装やリサイクル舗装材を採用を検討する。さらに、夜間においても動植物への影響に配慮しつつ、ライトアップによる演出を行うと同時に歩行者道上の安全性を確保する。

バス動線

地盤面レベルを一般の場内バスとIMTS（最先端技術を用いた中距離中量輸送システム）が回遊する。IMTSは専用道を確保し、歩行者道や管理用道路と平面交差を行わないことを原則とする。

場内道路（管理道路）

場内道路は基本的に既存道路を活用した計画とし、管理用道路は大型貨物車や緊急車両が通行できるように整備するとともに、パビリオン諸施設へ車両が安全に到達できるよう計画する。

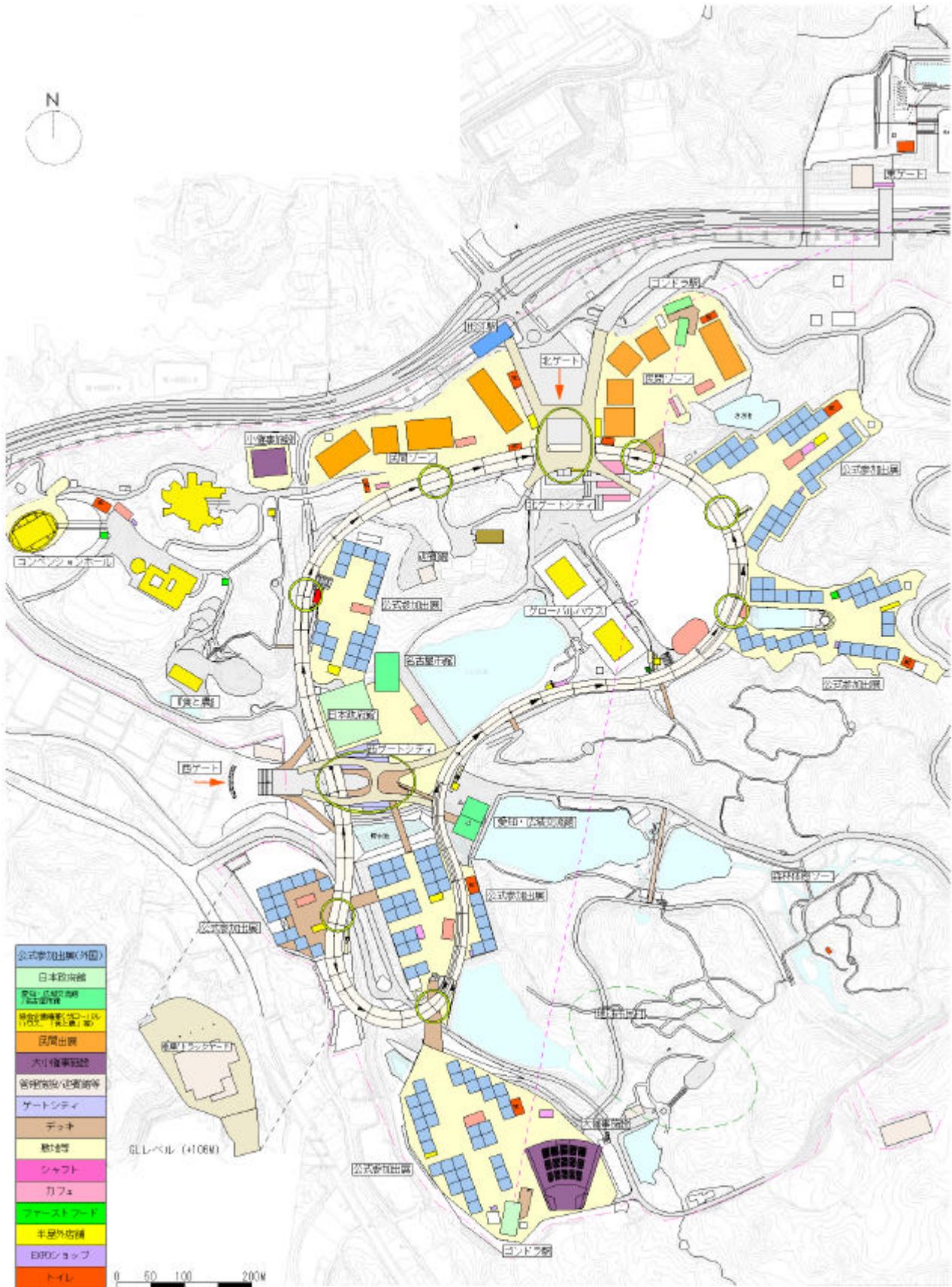
F. サービス施設計画

グローバル・ループ下には団体の集合場所、サービス施設（グローバル・ループからの避難階段、情報提供、休憩スペース等）を適宜配置し、コストの低減を計る。

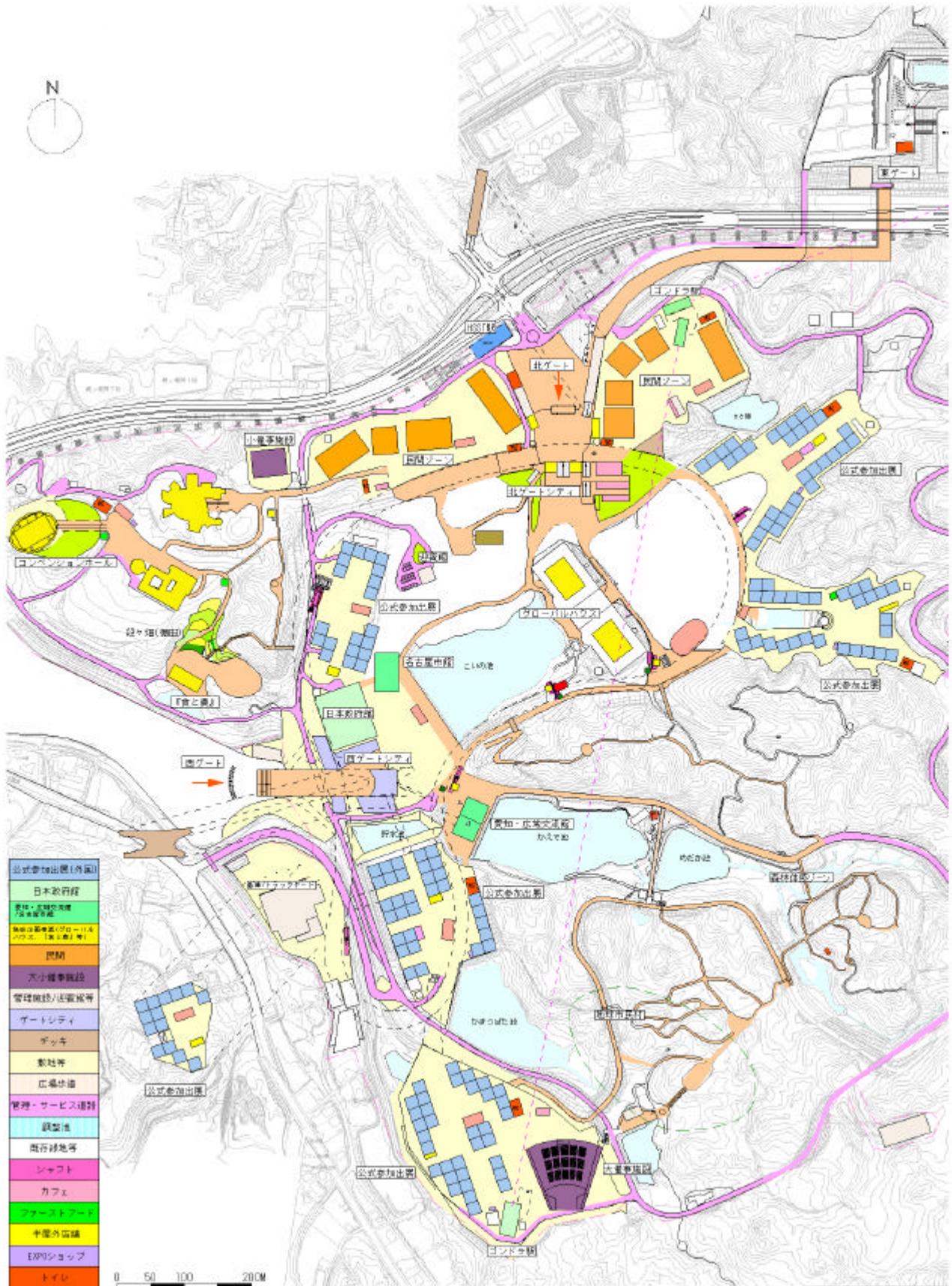
G. ランドスケープ計画

既存緑地をできるだけ残し、やむを得ず手が入ったところも野鳥や昆虫が訪れる様な樹種の植栽を施す。既存の池や起伏を生かし、特にグローバル・ループや仮設建築物との景観上の調和を図りながら一体的な会場作りを進める。

青少年公園地区の施設配置計画（ループレベル）



青少年公園地区の施設配置計画（地上レベル）



会場の全体配置計画

